タウンみやざき　2008 年 12 月号で紹介

talk up file

障がいがあっても写真で社会とつながりを。個性と自信を開花させる写真の力を信じて。

障がい者写真集団「えん」

街の中に出て実際に写真撮影するワークショップの様子

障がい者アートやエイブルアートというジャンルがあるが、さまざまなハンディキャップがあるにも関わらず、既成概念に縛られない自由な発想と表現力が多いため評価も高い。しかし、病気によっては、時に取り組むということさえ、精神的に難しいと感じる人たちもいる。そんな人でも容易に表現できる力が写真にはあるという信念から、病気があっても出に出て、社会とふれあうことやつながりを持ち、表現活動を行おうとしているのが「障がい者写真集団「えん」」だ。

家族が病気になって気が付く社会の壁

障がい者写真　集団「えん」を立ち上げたのは、写真家であり、写真　集団の活動の講師も務める小林敏一さん。小林さん自身は、息子さんが統合失調症という病気を持つため、当事者を支える家族という立場だ。息子さんの発病から、精神障害を抱える人と社会との壁や疎外のなさを実感。息子さんが仕事を辞す際にも、障害があるために受け入れてくれないという現状にぶつかってみて、差別や偏見を強く感じたという。そこで、障がいがあっても生きやすいよう支援するため、精神障害者の自立支援ネットワークとしてNPO法人「宮崎もやいの会」を3年前に立ち上げた。

NPO法人を立ち上げた一番の目的を、就労支援と（自立支援）はしたが、事業をやる場合に人材と資金をどうするかという問題で、行き詰まりを感じた時期もあったという。そんな中、芸術活動を行う障がい者団体「ひとみや」の活動を立ち上げ、北海道の絵画で賞を獲ることが当事者を支援しているという事例を聞く。この写真でも支援できるという発見が、小林さん自身に大きな励ましになったのだ。もともと絵ごころが写真家であったため、写真のことを伝えることはできるし、写真を撮った後の展示などの場所はすぐに思いつんだという。病院や支援センターなどに行ワークショップや撮影活動の告知をすると、講師の依頼も来るようになった。

人物を撮ってみたいという障がい者が撮影した写真家小林さん。

街の良さを再認識し自信にもつながる

「カメラ、特にデジカメはお金がかからない。基礎がなくても楽しいものも撮ることができる。うまいヘタは関係ないし、撮り方にルールもないから指導はしません。だけど、何かを伝えようと思った時点で、主体　が存在するのです」とにこやかに語る小林さん。写真は、自分で選択する行為がつきもの。依存性が強い人が多い病院だけに、少しでも自発性を持つ手助けになるのではと思ったのだ。どんな障がいがあっても、自分　のことは自分で決めるという積極的で意欲的な人もいる。だけど、精神的な障がいを持つ場合、何かやる気をだすということさえ難しい人もいるのだ。写真はそんな人たちに、お仕着せでありきたりのことをやらせるだけじゃなく、持っている感性を磨き、モチベーションを高めるためのプログラムになるのではないかと小林さんは期待している。現在活動日は第1・第3水曜日の午後1時から3時間程度。新規で入ってこようという人は少ないが、経験がない人や、デジカメを持っていない　人でも容易に撮影に参加できるように、貸し出しできるカメラも7台購入。負担なしにワークショップを取り入れられると、病院や支援センターでの取り組みも徐々に増えている。「撮影場所は街の中。撮影で地域に出る機会にもなるし、地域の良さの再発見もでき、地域貢献にもなると考えています」。撮影した写真は、撮影者のコメントを添えてブログにアップ。撮影して終わりではなく、情報発信し続けるのも社会に知らせることまで行っている。いずれはネットだけでなく、街中などで写真展を開催し、人と交流する場を設けたい気持ちも大きい。彼らの感性や個性を認めてもらえれば、障害の壁を一つ越えられると考えているからだ。最近では障がいがあるなしに関わらず、アートを通じて市民同士が共鳴しあう社会を目指す「市民の会スイミー」を、県内の芸術家や福祉関係者をはじめさまざまな職業の人と一緒に設立。将来的には、撮影した写真をストックし資料で貸し出すフォトライブラリーを開設したり、街の中に展示スペースを開き拠点として情報発信する場を設けたりなど、いろいろな社会の壁を乗り越えるための可能性も模索。アートの力で　本当の意味でのバリアフリーを目指している。

問合せ＝宮崎もやいの会
〒71・0036
090・3664・2574（小林）
※市民の会・スイミーの問合せも同様
E-mail m-moyai@kag.biglo.jp
http://photoen.moyachan.cc/